不詳（農村風景）

向井潤吉と民家 風土に生きるすがたを求めて

平成11年10月2日㊏－12月23日㊍

開館時間：午前10時－午後6時（入館は5時30分まで）
休 館 日：毎週月曜日（ただし祝日と重なった場合は翌日）
観 覧 料：一般200円（160円）、大高生150円（120円）、中小生100円（80円）、
65歳以上及び障害者の方100円（80円）
（　　）内は20名以上の団体料金

世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL.03-5450-9581 FAX.03-5450-9583

向井潤吉と民家

風土に生きるすがたを求めて

向井潤吉先生は1901年、京都に生まれられました。かつて宮大工の職にあった父親のもと、日本の伝統美に辻々で出会うことができる京都の町に幼い頃より育ちながら、先生は自身の美に対する想い、美に対する独特な感受性を育んでいったと思われます。と同時に、先生が目にされたもう一つの風景は、京都の町を取りまき、静かに糧を培っていた豊かな田園風景でありました。

10歳も半ばにさしかかるかどうかという頃、当時としてはまだ珍しい油彩画に心をひかれ、父親の反対を押し切ってまで西洋画の世界に進んだ先生は、京都・関西美術院で徹底して基礎を学んだ後に、ヨーロッパへと旅立っています。

先生は油彩画という日本にはない独特の技術と表現世界を、ルーヴル美術館に日参し、数々の名画の摸写を通じて体得されていったのです。それは、西洋絵画の長い歴史までをもふまえたものであったようです。

その後、戦争の時代を経て、先生は戦後、50年近くにわたって全国を旅し、それぞれの風土の中で、人々の生活のより所となりながら育まれてきた民家のすがたを求め続け、やがて民家の画家として知られるようになっていきました。

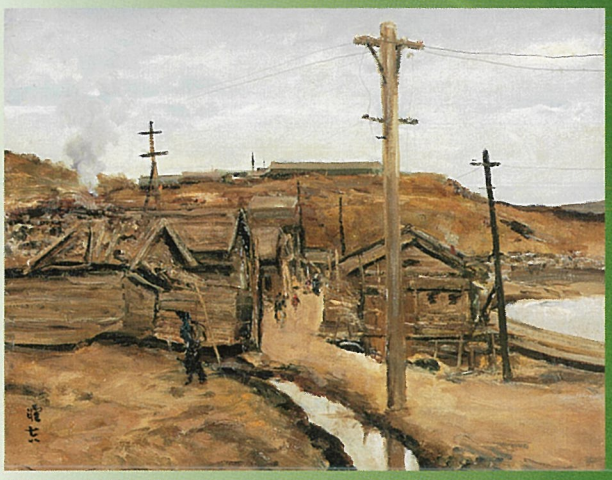
現在のように油絵具というものが定着していても、日本独特の建築物である草屋根の民家と、油絵具の取り合わせは、やや奇異な感じさえ与えます。それは、油絵具が持っている光沢ある独特な質感と、枯れた風情を醸し出す民家のあいだに生まれる異質な感触や、西洋美術の産物である油絵具と、今日においては珍重な存在となった民家とのあいだに生まれる違和感などによっているのではないでしょうか。

しかし、そうした異質なる両者を結び付けた先生の諸作品は、見る人の心におのずと郷愁の思いを起こさせる不思議な魅力を湛えています。それは油彩画についてのたしかな造詣と、風土に息づき生活の拠点となってきた民家のすがたを深く見つめてきた確たる実感が、向井先生の技術のみならず、その心の中でしっかりと融和してきたことを物語っているからなのだと言えましょう。

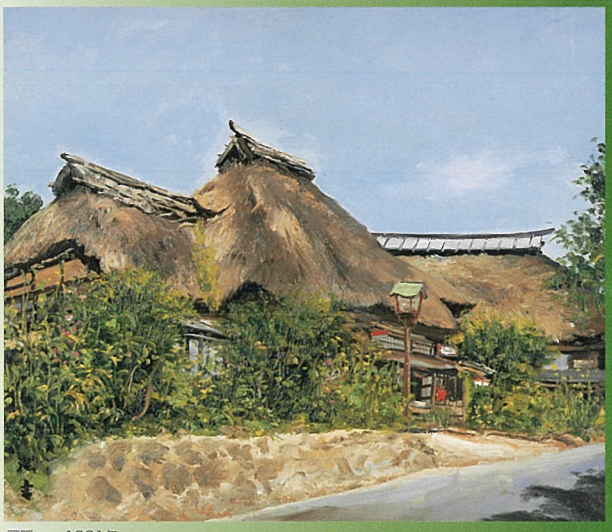
田麦俣にて　1963年

渡月橋々橋畔にて　1957年

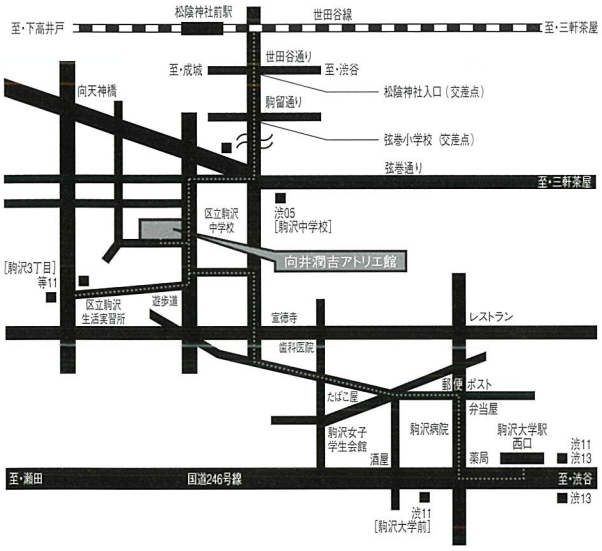
富士山と畑　製作年代不詳



春遠き町　1945-54頃



戸隠　1961年



交通機関

東急新玉川線　駒澤大学駅西口下車 徒歩10分
東急世田谷線　松陰神社前駅　下車 徒歩17分

東急バス（渋05）	渋谷〜弦巻営業所	駒沢中学校下車	徒歩　3分
東急バス（等11）	祖師谷折返所〜等々力	駒沢3丁目下車	徒歩　3分
東急バス（渋11）	渋谷〜田園調布	駒沢大学駅前下車	徒歩10分
東急バス（渋13）	渋谷〜砧本村	駒沢大学駅前下車	徒歩10分

世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1TEL.03-5450-9581 FAX.03-5450-9583